

『三国史記』「地理志」の高句麗地名漢字

—おもに日本語との比較による考証（五）—

高木雅弘

はじめに

前回は、高句麗語の音韻変化のうち、「音位転換」について非鼻音化、および鼻音の消失について説明させていただいたが、今回は同一の文字で二種類の読みが存在する例について分析させていただこうと考えている。

二種類の読みというのは、日本語で言えば‘音読’と‘訓読’であるが、同じ文字について、なぜ複数の読みが共存しているのかについては、記録者が複数存在したことと、『三国史記』の編纂過程で、その表記の発音が統一されなかったことが理由としてあげられる。

また、どの文字が音読でどの文字が訓読かという判断は、かなり難しい点があるが、その基準となるものは日本語やその他の言語との比較の過程で、単なる類似ではなく、厳密な音韻対応が見られるかどうかが重要である点を説明したいと思う。

今回も前回と同じく、使用した東洋文庫所蔵の資料は、以下の通りである。煩を避けるため、それぞれ①、②、③の刊本のように呼ぶこととしたい。（ ）内の数字は東洋文庫蔵書の請求記号である。

- ① (VII-2-134) 『三國史記』五十卷〔高麗金富軾奉宣撰、朝鮮刊【太祖三(明洪武二十七年)年跋】鑄字印補寫〕
- ② (VII-2-804) 『三國史記』五十卷〔高麗金富軾奉宣撰、昭和六年、京城、古典刊行会景印〕
- ③ (VII-2-1018) 『三國史記』五十卷・附『三國史記異體字類』〔高麗金富軾奉宣撰、日本坪井九馬三・日下寛校、大正二年刊、東京、文科大学史誌叢書之一〕

今回も巻数のみを掲げたものは、原則的に『三国史記』の巻数（例、巻第37）を指している。高句麗語と日本語の比較例を示す場合は、高句麗語を「高」と、（上代）日本語を「日」と略称することとした点は、これまでと同じである。また『東洋文庫書報』の題名は、同じ節に二回以上出現する場合、初回以外は『書報』という形に省略させていただいた。

不等号の記号は、開いている側が古い形で、閉じた側が新しい形であることを示し、ローマ字表記の左上のアスタリスクは、理論的に再構された音であることを示す（例、「奈兮」*nahe < *lahi < *laθi < *θila 《白》）。また参考資料について、前三回のもとの重複するものについては、今回も割愛させていただいた。

二種類の読みの例：訓読・特殊な読みの補遺

1. 「火」

以前、『唐』をあらわす「加火」の「火」を hwa と音読すべきことを提案させていただいた（『東洋文庫書報』51号、拙論60頁）が、今回は訓読で pīl（または puil）と読む例もとりあげる必要がある。

a. 「屈火」

下の例は「弗」 pīl という音読表記も見られ、明らかに「火」が訓読されたことがわかる。

二年…冬十月、牛首州獻白鹿、屈弗郡進白猪。一首二身八足。（〔太宗武烈王〕二年…冬十月、牛首州は白鹿を献じ、屈弗郡は白猪を進む。一首に二身・八足〔あり〕）（巻第5、新羅本紀、太宗王）

「屈弗」 kul.pīl の地は、新羅の本土の近くにあり、‘郡’という比較的大きな行政単位の中で他に発音が同一の地名が存在しない点から見て、『地理志』巻第35・溟州管下の「曲城郡、本高句麗屈火郡」（曲城郡は、もと高句麗の屈火郡〔なり〕）（巻37の地名表では「屈火縣）」であるこ

とはまちがいないが、この時期（西暦655年ごろ）には新羅の支配下にあったことがわかる。「火」は「伐」とも通用していたようであるが、これは新羅本土の地名に多い。

火王郡、本比自火郡。一云比斯伐。（火王郡は、もと比自火郡〔なり〕。あるいは「比斯伐」といふ）（巻第34、良州）

臨關郡、本毛火〔一作蚊伐〕郡。（臨關郡は、もと毛火〔あるいは「蚊伐」につくる〕郡〔なり〕）（同上）

音汁火縣。娑娑王時取音汁伐國、置縣。（音汁火縣。娑娑王の時、音汁伐國を取り、縣を置く）（同上）

どちらかと言えば、「伐」*pəl*の方が発音から見ても古い表記で、「火」*pil*の方が比較的新しい表記に見える。《部曲》や《邑》をあらわすとされた地名⁽¹⁾に、なぜ「火」という字が使われたのか不明であるが、おそらく*pəl*から*pil*への音韻変化が生じた際に、実際の意味とは関係なく、訓読字ではあるが同音の当て字として使われたのであろう。

もし、「火」の読みが高句麗と新羅でほとんど同じであるならば、それがどちらからどちらへという影響の方向の問題は措くとしても、その伝播の時期が三国時代の末期（七世紀の中葉前後）からそれほど古くはさかのほらないことを意味する。

なお、これを朝鮮語の *pilk-*《赤い》、*palk-*《明るい》や満洲語 *fulgiyan*《赤》、モンゴル語 *ulayan*（中世語 *hulayan*）《赤》と比較する意見がある⁽²⁾が、それぞれの祖形の語根 **pul*（朝鮮語の場合は **pol*）という要素に接尾辞（*+k* // *+giyan* // *+ayan*）が付加されて、二次的に成立したことばのように見える。

ところで、日本語の「ヒ」《火》（上代語は「イ列乙類」の *fi*、合成語では「ホ～」*fo+*）を南島祖語の **apuj*（= **apuḷ*）《火》と比較する説がある。**apuj*の第一音節の *a*が脱落し、残った *puj*が変化して **poj*になったということである⁽³⁾。

上代日本語の「イ列乙類」*i*（< **uj* ~ **oj* ~ *öj*）の音が高句麗語の音節末では規則的に流音（*.l* / *.r*）になることは、これまで何度も述べて

きた通りであるが、この《火》をあらわす pīl も、そうした特徴によく合致していると言える。

高、「～乙」+il < +hīl 「～勝」< *kīl < *kə:l < *kuəl < *küälj < *kōj
《木》

：日、「キ」< kī < *kōj 《木》（合成語「コ～」< kö+）

高、「勿」mīl < *mə:l < *muəl < *müälj < *mōj 《復旧〔する〕》

：日、「ミ・ル」< mī- < *mōj- 《廻〔めぐる〕》（「モ・トホ・ル」
< mö+tōfo- 《廻》）

高、「～忽」+hol < 「溝漣」*kol < *kulj < *kuj 《城》

：日、「キ」< kī < *kuj 《城、柵》（「ク・ヘ」《柵・辺》）

高、「骨」kol < *kulj < *kuj 《黄》：日、「キ」《黄》（「クガネ」《黄金》）

「伐」pəl は「弗」pīl よりも古い音を反映しているように見えるが、もし *pəl のような音も表現したことが認められれば、さらに *pəlj < *poj のような音を復元することは可能であろう。上代日本語「ヒ」《火》の合成語形「ホ～」の母音は「オ列甲類」o と「乙類」ö の区別を失っているが、動詞「モユ」（未然・連用形「モエ」、他動詞「モヤ・ス」）《燃》の「モ」が甲類 mo であるので、*poj という祖形を再構することができる。

「モエ」< *mojaj < *N.poj.a+i

それに対して、朝鮮語にはそのような原則（語末半母音 j の流音化）が必ずしも適用されるとは限らない例が見られる（朝鮮語は「朝」と略す）。

朝、taj 《竹》：日、「タケ」（< takē < *takaj）《竹》

朝、pəlj 《船》：日「フネ」（合成語「フナ～」< *punaj）《船》

したがって「火」をあらわす pīl は、音韻変化の原則から見た限り、日本語「ヒ」《火》と対応するのみならず、もともと高句麗語の固有語として存在した可能性も排除できないと言える。

「屈火」《曲城》の「屈」kul 《曲》は、意味の類似した別の漢字に置き換えた（屈>曲？）だけという考えもあるかもしれないが、皮相的には朝鮮語の kup- 《曲がる》によく似ている。ただし、kup という発音をそのまま表記したものは思えない。

高句麗語の母音 u の一部が *ü にさかのぼることを考えれば、kul は

*küRV (Rは流音、Vは母音) のような形にさかのぼり得る。また、日本語「クル・フ」《狂》ということばが「正常」とされた状態から逸脱する」ことを意味するのであれば、《曲(まがる)》とも通じるように見える。

高句麗語の動詞の一部には日本語の未然形と対応する接尾辞の痕跡が見られることから、kul.pilの異分析形 kulpは、日本語「クル・フ」の未然形「クル・ハ」と対応するかもしれない。それに《城》をあらわす「~忽」+holが接尾辞のような形で付加され、その母音oが弱化(> *ʌ > *i)すれば「屈弗」のような音になった可能性がある。

*kürü-pä > *kur.pə > *kul.p[i]+hol > *kulp+[h]il

また、「クル・フ」に《神がかりして舞う》という意味があることを考慮に入れば、《くるくる回る》を意味する「クルベク」《転》や城の周囲を取り囲む「クル・ワ」《曲輪、郭》の語根「クル」、さらにはモンゴル語 күрдүн《輪》とも酷似していると言える。ちなみに、「マガ・ル」《曲》をあらわす日本語に対応する高句麗語は、《臂(ひじ)》をあらわす「馬」maであろう。

b. 「伊火兮」《縁武》

後の図版に示したように、巻第35の「縁武縣、本高句麗伊火兮縣(縁武縣は、もと高句麗の伊火兮縣[なり])」に見える《縁武》の「縁」は、①の刊本では旧字体の「縁」よりも現在日本で使われている「縁」に近い。②の刊本では右側のつくりの上部「互」が「マ」の下に「一」とその下に点がふたつあり、③の刊本では近代の活字体で「縁」と「校正」されている。

「縁」の下の割注の別字は、それぞれ「梓」(②の刊本では、右側のつくりの部分が「一」の下に「羊」)に近いが、本来は「椽」(エン)の誤記であろう。

「武」は、①の刊本では普通に「武」となっており、②の刊本では正という異表記がみられ、上と右側の部分に欠画が見られる。③の刊本でも欠画が見られ、正となっている。

それに続く「伊火兮縣」については、①の刊本では「伊」が「併」と

なっており、②の刊本では「伊」の右側のつくりの部分の「尹」が「那」の左側の部分のような文字になっており、③の刊本では「兮」が「𠂔」となっている。

巻第37の「地名表」の「伊火兮縣」では、①の刊本では「兮」が「𠂔」になっており、②の刊本では「兮」が「𠂔」になっており、③の刊本ではきれいに校正された形の「伊火兮」となっており、いずれも別名（意訳・漢訳形）がない。

以前筆者は、《五》をあらわす一部の刊本の「弓火」が、日本語「イツ」《五》との比較から「兮次」*hec (< *hitu[ŋ]) のくずれた字体（「兮>𠂔>弓」、および「次>火」）から変化したものであることを提案させていただいたが、ここでも「兮」は「𠂔」か「𠂔」に変化していることがわかる。なお、(李氏)朝鮮時代以降に編纂された文献（『世宗實錄』『地理志』等）に出現する「于次」《五》の「于」は、「兮」をくずした「𠂔」が、さらに「𠂔」に変化して‘修正’された形であろう。

以上のように、この地名の表記にはかなりの不安定性が見られるが、「伊火兮」および統一新羅時代の改名形《緣武》を、それ以外の文字に訂正すべきであるとする積極的な理由は見当たらない。なお、「緣」（エン）が「綠」（リョク・みどり）となっているものは一点も確認できなかった。

ところで、「屈火郡」の「火」が「弗」pülと読まれた以上、同じ曲城郡の管下の「伊火兮縣」の「火」をhwaと読むのは不自然に見える。「伊」はiと読むのが普通であるが、《鄰》を意味する「伊伐」を、「自伐」のように「自」cAと読んだ例も存在することは、以前紹介したことがある（『東洋文庫書報』51号、拙論71頁）。ただし、この「伊」が「自」のように読まれたという証拠はない。

‘緣武’《武に緣（よる、したがう）》という意味から考えると、「火」をhwaと読んだ場合、「伊火兮」i.hwa.hjəj（修正形 *ihuahe）の前半 *ihu（《武》に比定）は、日本語の「イクサ」《戦、軍》、「イクハ」《的（まと）》の「イク」に酷似している。ただし、*ikuのような音が出発形であれば、高句麗語の音韻変化の原則では *ju（さらに *u）のような形になっていた可能性が高い。

一方、「火」を *pil* と読んだ場合、「伊火兮」 *i.pil.hjəj* (修正形 **ipilhe*) のうち、中程の *pil* の頭子音 *p* を除いた *il* は、日本語の「ヨ・ル」《寄、縁、由》の未然形「ヨ・ラ」と対応し得る。

il < **ə:lr* < **uə.rə* < **jüä.rä* < **jö-rä*

そのうしろの **.he* は、**.ki* / **.θi* / **.pi* (それぞれ日本語の「キ」「シ」「ヒ」に対応) のいずれかの音にさかのぼり得るが、日本語「アフ」《合》の連用形「アヒ」の収縮形「ヒ」(< **[a]pi*) がそれにあたるのではないか。日本語では動詞の前で接頭辞のように使われている「アヒ」《相 (= 互いに)》も、指小辞「～ス」**+s* (日本語「サ～」《小、狭》) と同じく、高句麗語では接尾辞として出現する可能性が高い。したがって **ilhe* 《縁》は、日本語の《互いに近づく、つながる》を意味することと比較できることになる。

前半の **i.p[i]* (《武》に比定) は、語頭で「伊」*i* の音を維持している点を見れば、第一音節は長母音の **i:* か、*i* の音が連続する **iCi* (*C* は子音で *k* ~ *θ* ~ *p* のうちのいずれか) のような祖形にさかのぼり、日本語「イク」《生、活》の連用形「イキ」(名詞《息》も参照) がそれに対応すると考えられる。

岩波版『古語辞典』では、「いきほひ」《勢》を「イキ」《活力》と「オホ・ヒ」《覆うこと》の合成形と見ているようであるが、**i.p[i]* のうしろの *.p[i]* が合成語の一部であれば **.pa* / **.pə* にさかのぼる可能性が高く、日本語「オホ・フ」《被、覆》の語幹の収縮形と対応するかもしれない。

**i.p[i]* < **ihi.pə* < **iki.+[ə]pə*

したがって《武》を意味する **i.p[i]* は、日本語「イキホ・ヒ」《勢》の語幹と対応する可能性を提案したい。

2. 「斤」

《赤》を意味する「沙非斤」*sa.pi.kin* は、「沙伏」*sa.pok* (= **saplk*) と共存していることから、それより変化した形である **sapik* のような音を推定することができ、「斤」は *kin* 以外に音節末の子音 *.k* として使用された可能性が高い。

この点についてはすでに言及されている⁽⁴⁾ が、特に「沙非斤乙」《赤

木》の「～乙」+il《木》のように、母音で始まることばが後に接続しても、漢字一字で「契」「訖」（いずれも kil）のように合体せず、分析的に表記されている点が注目される。

ほかにも、「加知斤」*katik《(東) 墟》、「(骨) 乃斤」*[kol.nak《(黄) 驍》の「斤」も語末の子音 .kのように読まれたと考えられる点は、すでにふれたことがある。ただ、これから取り上げるのは普通に kin のように読まれた例であり、この文字も二種類の読み方が共存していたことを指摘したいと思う。

a. 「斤尸」

《文》をあらわす「斤尸」は、朝鮮語 kil《文》と比較することに問題はないが、kilのような音は他に一字で表記できる漢字（「契」「訖」）があるのに、なぜ二字で表記しているのかという点に疑問がある。おそらくその読みは kilではなく、少なくとも記録者の‘音韻意識’（あるいは‘語源意識’）では kinに近い音であった可能性が高い。

これを満洲語の hergen《文字》と比較する意見がある⁽⁵⁾が、トゥングース系の民族の中に、古代の高句麗人に影響を与えるほどの文字文化をもった国や民族が存在したのかという点は、ここでは問題にしないとしても、とりあげられた満洲語 hergen (= hǎrgən) は、その前身ともいえる女真語を含む他のトゥングース系言語には、対応することばが見出せない。

これはむしろ（古典）モンゴル語の kele[n]《舌、ことば》と比較するのが妥当ではないか。同じく《通訳》にあたることばは kelemür.či というが、この前身にあたることばは、すでに五世紀頃の北魏で使われていた鮮卑語（拓跋語）にも存在したようである⁽⁶⁾。

通事人爲乞萬眞。…（《通事人》は「乞萬眞」となす）（『南齊書』卷57、「魏虜列傳」）

「乞萬眞」の「乞」k'jət《事》が kele[n]と、「眞」tɕjən《人》が職業や属性をあらわす接尾辞+či (< *+čin) と、それぞれ対応していること

はわかるが、当時の漢字の入声音の韻尾 .t が流音 (r / l) も表記していた可能性⁽⁷⁾ を考えると、「乞」は *kəl に近い音をあらわしていたことが考えられる。なお、《通》にあたる「萬」 mjen (.mür) は、おそらく mör 《足跡、道》(mör.le- 《跡を追う》) と関係があるかもしれない。

またこれと関連して、北魏以前に遼西を中心として遼東、河北方面に勢力をもっていた鮮卑族や、その影響下にあった国家「三燕」(前燕・後燕・北燕) との関係も注目すべきであろう。これらの国は、さまざまな面で高句麗との関係が深かったことはよく知られている。

海夷馮跋、字文起、小名乞直伐。本出長樂信都。(海夷の馮跋、字は文起、小名は乞直伐〔なり〕。もと長樂〔郡〕の信都〔縣〕より出〔い〕づ) (『魏書』卷97、海夷馮跋傳・附、馮文通傳)

北燕の事実上の創始者である馮跋〔フウ・バツ〕(在位409～430年)が、日常的に鮮卑語を使っていたかどうかは明らかではないが、その字(あぎな)の《文起》が幼名の「乞直伐」と対応していたとすれば、「乞」*kəl が《文》を意味していたことは確実となる。そのうしろの「～直」+tiək は、接尾辞の一種であろう。

モンゴル語 +tei < *+tägi? 《(共同格)～とともに、～をもって》

モンゴル語で《起きる》を意味することばは bos- になるが、「伐」bǫwət がそれに当たるかもしれない。あるいは、bol- 《成る、発生する》の可能性も捨てがたい。

以上のことから、高句麗語の「斤尸」*kinl 《文》は、鮮卑語の「乞」*kəl 《文》と対応し、*kälän のような祖形が音位転換して形成された可能性が高い。高句麗語の形は、音の配列が移動した点をのぞけば、五世紀前半頃の鮮卑語よりも古い時代の音を反映しているように見える。ただし、意味的にはモンゴル語の身体名称《舌》の方がより原初的で、それから《ことば》、さらに《文》という意味に発展したと考えられる。

*kinl < *känlə < *kälən < *kälän

上の例のように、高句麗語で、本来語末に置かれるべき子音が第一音節の末に移動した例はすくなくない。

高、「～忽次」*+holc < *kolc < *kultu < *kutulj < *kutuj 《口》

：日、「クチ」(合成語「クツ～」)《口》

高、「骨尸」*koll < *kolri < *kuril < *kuralj < *kuraj / *kulaj

《朽(=木製のこて)》

：日、「クレ」《樽(=材木、板)》

高、「骨衣」*kor'e < *kol'i < *kulji < *kujil < *kujalj < *kujaj 《荒》

：日、「クユ」(未然・連用形「クエ」)《崩》

高、「首泥」*sju[n]ni < 「述尔」*sjulni < *sjunil < *si'unalj

< *unaj+si 《峯》

：日、「ウネ」《敵》、「ウナジ」《項》

ちなみに、《文》ということばは典型的な文化語彙であるが、日本語には「斤尸」にあたることばに対応する形が見当たらない。強いて求めるとすれば、「コロ」(上代語であれば *kōrō) のような音になると思われるが、少なくとも《文》、あるいはそれに近い意味をもったことばとしての存在は確認されない。

日本語と高句麗語は、数詞や身体名称、動詞・形容詞の語幹などの基礎語彙の対応が顕著であるのに対し、貸借が容易なはずの文化的語彙(《馬》《鉄》その他)の対応は、はなはだ貧弱である。このことは、両者の近似性が共通の祖語からの分離ではなく、歴史時代に入ってから「文化交流や『政治的関係』(一方から他方への征服や教化)によってもたらされた」とする説が成立する可能性は、きわめて低いと断定して間違いない。

b. 「馬斤押」《大楊管》

《大楊管》を意味する「馬斤押」は、ma.k.ap か ma.kin.ap か、どちらの音で読まれたのであろうか。これも以下に述べる点から、やはり「斤」は kin と読まれた可能性が高いと見られる。

拙論の「初篇」(『東洋文庫書報』47号、20頁)では《楊》をあらわす「要隠」jo.inの「要」を、その異形「安」(巻37の「地名表」の「楊岳、今安嶽郡」を参照)と比較して、「安」か「晏」(発音は、いずれも an)の誤記であった可能性を提案したことがある。

「要隱」が「安隱」（または「晏隱」）*aninの誤記であれば、日本語「ヤナギ」《柳》の「ヤナ」と正確に対応し得るが、「安」anのみの形は、それがさらに収縮したものであろう。「馬斤」《大楊》makinの+inは、それが接尾辞のようにmak《大》に付加されて、さらに弱化した結果、成立した形であると考えられる。

*janan > 「要（＜安？）隱」*anin > 「安」an[n] > *+an > +in

なお、古い漢語「楊」jaŋが上代日本語に借用され、うしろに《木》をあらわす言葉が接続して「ヤギ」（< jagi < jaŋ+ki）《柳（＜楊・木）》の形に変化したのは妥当なものと考えられるが、jaŋがjanaに変化したというのは、音韻変化の趨勢としては不自然に見える。もし、「楊・の」の格助詞「～の」が「な」に変化したのであれば、「ギ」《木》は濁音にはならず、清音「キ」という形で出現していたのではないか。

語末の「～押」+ap《管（くだ）》は、「甲」*kap《穴》と同じ要素であろう。語頭、および単独形では「甲」となり、それ以外（合成語の二番目以降）では「～押」になる（「烏斯押」《猪窠穴》を参照）。

*kaba > *kapɔ > 「甲」*kap[i] > 「～押」*+[h]ap（日本語方言形「カマ」《洞、穴》）

このように、高句麗語のkは母音に挟まれた場合、hからさらにゼロoになって消滅に向かっていた可能性が高い。したがって、「馬斤」が新しい時代の借用語でなければ、おそらく*ma.kinのkの後に隠れたkかhの存在が推定される。そのような例として、以前とりあげた「若只」*njak.kiがある（同『書報』48号、拙論15頁）。

「馬斤」makinの前の部分の単音節語*makは、母音aを保存していることから、本来は二音節語であったと考えられる。これは高句麗の官名《太大兄》をあらわす「莫何々羅支」の「莫何」*makha《太》がさらに収縮（子音の同化と音節末母音の弱化）した形であろう。『翰苑』所収の『高麗記』の方が『三国史記』巻37の「地名表」の形よりも古い音を反映していると言える。

其國建官有九等。其一日吐拵、比一品。舊名大對慮、惣知國事。…次曰太大兄、比二品。一名莫何々羅支。次鬱折、比從二品、華言主

簿。(その國、官を建つる〔もの〕九等あり。その一に「吐擗」といひ、一品に比す。もと《大對慮》〔「慮」は「慮」のあやまり〕と名づけ、国事を惣知す。…次に《太大兄》といひ、〔「正」の脱か〕二品に比す。あるいは「莫何々羅支」と名づく。次に「鬱折」〔といひ〕、從二品に比し、華〔=中国〕に《主簿》と言ふ) (『翰苑』「高麗」の条の注)

『翰苑』の写本の影印⁽⁸⁾では、「莫何」の後に繰り返しの符号「々」(踊り字。実際の形は平仮名の「く」に近い)が見え、これは日本での筆写の過程で付された可能性が高いが、「莫何何」は基本形「莫何」の上に、さらに「莫何」を加えた強調形「莫何・莫何(羅支)」の省略形かもしれない。

高句麗末期の権臣である泉蓋蘇文が就いた地位、「莫離支」mak.li.ci (= *mak[h].li.ci ?) という官名は、音韻的には「莫何羅支」に酷似しており、その第二音節以降の母音がさらに弱化した形に見えるが、皮相的には古代インドの梵語 mahārāja (漢訳仏典では「摩訶羅闍」などと表記)《大王》に似ている。

ただし、王族以外の臣下の者が‘王’を称することが国内外的に許されたのかという問題もあるが、第一音節の音をあらわす文字が ma ではなく、なぜ mak の音をあらわす文字が使われたのかも問題である。高句麗語の音韻変化の原則から言えば、mahā (または maxa:) のような音は *ma'a の段階を経て、収縮して *ma のような音になったはずである。これは、やはり後でふれることになるが、武官名の「莫何邏繡支」《大幢主》と同じく、高句麗語内部で形成された可能性が高いと見られる。

官位の上では「大對慮」(一品に相当)の方が「太大兄」(〔正〕二品に相当)よりも上位にあり、‘惣〔=総〕知國事’《国家に関わることをすべて取り仕切る》という権能上から(実務的な意味での)‘最高権力者’の立場に近いことが分かるが、音韻的には「莫離支」とはまったく似ていない。

それに対して「大對慮」とその別名「吐擗」^{tʰo.col}は、互いに対応しているように見える。「吐」は「大」の上古漢字音 (*dad ?) が変化し

たように見えるが、高句麗固有語の「内、奈」 $n\Lambda j$ （修正形 $*n\Lambda$ ）《長、大》にあたる音が非鼻音化した可能性もある。これについては、前にふれたことがある（同『書報』52号、拙論28～33頁）。

高句麗の官名「對盧」 $twəd.lo$ は、すでに三世紀の史料（『三国志』「魏書」東夷傳）に出現するが、七世紀前半までの発音で「掙」 col （ $< dz'uət$ ）に変化したことにより、頭子音 t に円唇性の母音が接続していたことがわかる。これはおそらく、日本語の「トトノ・フ」《調、整》の語幹（ $< tö.tö.nö-$ ）と対応するかもしれない。

「掙」 $col / *cəl[.l]$ $< *t'uəl[.li]$ $<$ 「對盧」 $*tuəd.lə$ $< *tüät[.l]ä$
 $< *tötö+lä-$

なお、「トトノ・フ」ということばについては、岩波版『古語辞典』（見出しは連用形「ととのひ」）に《一人の指揮によって率いる》という解釈を掲げている点を指摘したい。

ところで、高句麗語の h の一部が日本語の「サ行」の音と対応している点を考慮に入れれば、「莫何」《太》は日本語の「マサ・ル」《優、勝》の語幹と比較できるかもしれない。「マス」《増》はその収縮形であろう。

$*mak+$ $<$ 「莫何」 $*makh\Lambda$ $< *mak\theta a$ $< *ma\theta ak$?

「莫何」の次の「羅支」の「羅」 la （または $*l\Lambda$ ）は、高句麗語で《長、大》を意味する「内」「奈」 $n\Lambda j$ （ $= *n\Lambda$ ）と共通の要素で、日本語の「ナガ・シ」《長》の語幹と対応し得るが、ここでも非鼻音で表記されている点が注目される。語頭では t （または d ）になったものがそれ以外の位置では l になったものか。

うしろの「支」 $+ci$ （修正形 $*+cī$ ）《兄》は、「車」 $*ca$ 《上》が接尾辞的に付加されたことによって母音が弱化した形であろう。これは、日本語の「カサ」《嵩（＝高い所）》を意味することばと対応し、《年齢・地位が高い人物》を指したことばであると考えられる。

$*+cī$ $< *+c\Lambda$ $< *ca / *ca$ $< *ca[h]a$ $< *caka$ $< *kaca$

同様の母音の弱化（ $*a > *l\Lambda > *i$ ）は他の例でも見られ、弱化が進行する前の基本形と同じ時期に共存していたこともわかる。

「波且」 $*pa.ca$ 《波豊》：「自伐支」 $*capil.cī$ 《鄰豊》

「毛乙」 $*m\Lambda l$ 《鉄》：「乃勿」 $*namil$ 《鉛（＜青い金属？）》

「骨乃斤」*kol.nak 《黄驍》：「伐力」*pɔl.liik (< *pɔr[ɔ]+lak) 《緑驍》
 したがって、「羅支」が《大兄》の直訳形となり、「莫何」《太》はその上に重ねられた尊称のようなものか。なお、同じく『翰苑』注に記載された官名《小兄》を意味する「失支」の「失」sil (=fil / cil) 《小》は、日本語の「シ・タ」《下(方)》、「シ・モ」《下(面)》の「シ」と比較できるかもしれない。

ちなみに、上代日本では《大兄》を「オホ・エ」、《少兄》を「スクネ < スクナ・エ」(漢字の音表記では‘宿禰’)と言い、人名で多く使われていたが、日本語と高句麗語を音韻面で見ると、両者には直接的な借用関係は認められない。それぞれ独自に形成されたものと考えるのが妥当であろう。

ついでながら、「莫何羅支」に発音が似た名称としては、同じく『翰苑』の注に、各地の城に置かれた武官《大幢主》の別名「莫何邏繡支」が見えるが、これも「莫何」は《太》をあらわしたと見られ、次の「邏」la も「羅」と同じく、「内、奈」*nɔ 《長、大》と対応したものであろう。

うしろの「繡支」sju.ci 《幢(トウ)主》は、sju と +ci の要素に分解され、語末の「支」+ci (= *+ci) 《主》は、前出の《兄》と同じく《年齢・地位が高い人物》を指したことばであろう。

高句麗語の Cju (C は子音) の一部が日本語の [C]juCi と対応する原則があることを考えれば、「繡」*sju (< *Cusi) 《幢(=はた)》は、日本語の「ムシ」《苧(=からむし)》、またはそれで作られた布《帔(むし)》と対応し得る。

高、「首」sju < *si'u < *usi 《牛》：日、「ウシ」《牛》

高、「述」sjul < *si'u.la < *usi.la- 《軼》：日、「ウシナ・フ」《失》

高、「主夫」cju.pu < *ci'u.pɔ < *uci.pa[k] ? 《長(おさ)》

：日、「ウシ」《大人》(動詞「ウシ・ハク」《領有する》)

ちなみに朝鮮語の mosi 《苧》は、音位転換も単音節化という収縮も見られず、第二音節が i という開音節で終わっている点で、高句麗語よりも日本語の形に近いと言える。このことばは、もとより貸借の容易な文化的語彙にふくまれるが、中期朝鮮語 sjo 《牛》が高句麗語「首」sju と対応している点を考えれば、sjo か mosi のいずれか、あるいはその両

方とも、それぞれ別々の言語から南韓国語へ伝えられたという可能性を考えた方が、音韻の変化を合理的に説明できるかもしれない。

「繡」 sju < *siwu < *siNbu < *Nbusi

以上、説明が長くなったが、「馬斤押」《大楊管》の「斤」はkinと読み、*mak[h]《太（ふとい）》+in《楊（やなぎの）》+ap《管（くだ）》と分析するのが妥当であると考ええる。

c. 「斤」《嘉》

巻第37の「地名表」には「斤」の別名を「並」としているものがあるが、一見したところ、両者の関係はわかりにくい点がある。

斤平郡、一云並平。(斤平郡、あるいは「並平」といふ)

「並」は、おそらく「斤」の誤記から変化した「并」pjəŋを「並」の異体字と認識したことによって‘修正’した形かもしれない(斤>斤>开>并>並)。一方、この地名の「斤」は、統一新羅時代になって《嘉(=よい、よみする)》と解釈されたことがわかる。

嘉平郡、本高句麗斤平郡。景德王改名。(嘉平郡は、もと高句麗の斤平郡〔なり〕。景德王、名を改む)(巻第35、地理二、朔州)

「斤」は語尾や音節末では .k と読まれた例があるが、語頭で子音のみの k と読まれた例は確認されない。そもそも、高句麗語では半母音 (j / .w) が子音のうしろに接続したもの(例、mjər.o「滅烏」《駒》、kwan「管」《雲》) 以外に、二重子音が語頭に立つ例は知られていない。また、《文》をあらわす「斤尸」がkilではなく、kinlであったことはすでに述べた。

もし「斤」が語頭でkinと読まれたのであれば、上代日本語ではkōnV (Vは母音) の形であらわれた可能性が高い。《嘉(よし、よみする)》という意味を尊重すれば、日本語の動詞「コノ・ム」(形容詞形「コノ・マ・シ」)《好》の語幹 (< kōnō-) に酷似している。これと似たよ

うな地名は新羅の本土地域でも見られる（ただし、統一新羅時代〔757年〕の改名形）。

嘉猷縣、本近〔一作巾〕品縣。景德王改名。（嘉猷縣は、もと近〔あるいは、巾に作る〕品縣〔なり〕。景德王、名を改む）（卷第34、尚州、醴泉郡）

なお、日本語「コノ・ム」の語幹と南島語（原始インドネシア語）*kənaŋ*《愛慕》とを比較する説があることを指摘したい⁽⁹⁾。

猷は、「猷」*ju*《はかる、はかりごと》の略体字である可能性が高い。「近」は*kin*と読むが、「巾」は*kən*と読み、やや古風な発音に見える。「品」*p^hum*は、『集韻』の反切では「丕錦切」（「丕」*pi*の声母*p*と「錦」*kim*の韻母*.im*の組合せ）となっており、古い時代には*pim*のように読まれたのではないかと考えられる。*pim*は**pəm*のような形にさかのぼり得るが、これは日本語の「オモフ」《思、想》（「オモヒハカル」《慮》も参照）の収縮形「モフ」の未然形「モハ」と比較できるかもしれない。

**[ə]mə.pa > *pə.mʌ > *pəm[i] > pim ?*

これも現在の慶尚南道咸安付近にあった地名「漆吐」を《漆隄》と改名したように、本来、高句麗とは無関係の地名を高句麗語の知識によって、よく似た発音のことば（「吐」《隄》）で解釈した可能性は排除できない。高句麗の支配が及んだ可能性がほとんど考えられない百濟領の南端の地名「伏忽」*pok.hol*を、統一新羅時代に「寶城」と改名した例もこの中に入る。

「斤平」の「平」*p^hjəŋ*は翻訳されていないように見えるが、このことばは必ずしも《平野》を意味したとは限らない。「波害平吏」《額迂》の「平吏」《迂（<遷）》のように、《崖》を意味していたことばの省略形であった可能性もある。

まとめ

今回は高句麗の地名に使われた漢字について、二種類の読み方がある

ものを扱ったが、「火」（音「弗」p'il）ということばは、日本語と対応し、なおかつ高句麗語の音韻変化の原則に合致していることから、本来高句麗の固有語として存在したのではないかという疑問を提起させていただいた。

また、「斤」をkinと読む例については、「馬斤押」《大楊管》の「馬斤」mak'in《大楊》の前半mak《大》が『翰苑』に引用された高句麗の官名「莫何々羅支」《太大兄》の「莫何」《太》（「莫何々」は強調形「莫何・莫何」の省略か）と対応することを提案させていただいた。

前にも述べたことがあるが、高句麗国が存在した当時（七世紀以前）の中国史料に見られるものや、新羅の支配が及んだ北限、大同江以北（記録として残っているのは鴨緑江以北）の地域で使われていたのと共通の要素については、高句麗の国内で普通に使われていた‘高句麗語’として認定しても何ら問題ないと言える。

また、今回は《文》をあらわすことばのように、日本語と対応しないものの分析も無駄にはならない。このような‘文化語彙’は高句麗語と日本語、あるいはそれ以前の濊貊語と倭語の成立の状況や、それぞれの言語と他の言語との接触の問題を考える上で重要である。

注

- (1) 鮎貝房之進「借字攷（一）」（『朝鮮学報』第7輯、〔天理〕朝鮮学会、昭和30年〔1955〕）15頁。
- (2) Ki-Moon Lee, A Comparative Study of Manchu and Korean. (Ural-Altäische Jahrbücher, 30-1/2, Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1958) 110頁。
- (3) 村山七郎『日本語の研究方法』弘文堂、昭和49年〔1974〕10月、58, 160頁。
- (4) 馬淵和夫・他「『三国史記』記載の「高句麗」地名より見た古代高句麗語の考察」（『文藝言語研究・言語篇』4、筑波大学文藝・言語学系、1980年所収）33頁。
- (5) 李基文『韓国語形成史』五、「高句麗語」Ⅱ。「高句麗語語彙」（『韓国文化史大系』V、「言語・文学」上、高麗大学校民族文化研究所、1967所収）

84頁。

- (6) 白鳥庫吉「東胡民族考」7 (『史学雑誌』22編1号〔通編265号〕、明治44年〔1911〕) 17-19頁〔通頁1397-1399〕。
- (7) 小川環樹「稻荷山古墳の鉄剣銘と太安万侶の墓誌の漢文におけるKoreanismについて」(『京都産業大学国際言語科学研究所報』第1巻・第3号、昭和55年〔1980〕) 80頁。
- (8) 竹内理三校訂・解説『翰苑』吉川弘文館、昭和52年(1977)、40頁。
- (9) 村山七郎「比較研究とアクセント」(『京都産業大学国際言語科学研究所報』第7巻第1号、昭和60年〔1985〕) 38頁。

卷35「縁武縣」

刊本①

縁
梓一作
武縣本高句麗併火兮縣

刊本②

縁
梓一作
正縣本高句麗併火兮縣

刊本③

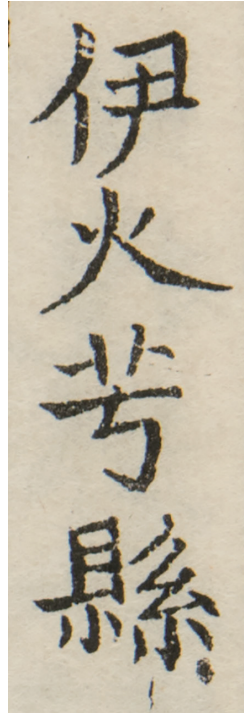
縁
梓一作
正縣本高句麗伊火兮縣。

卷37「伊火兮縣」

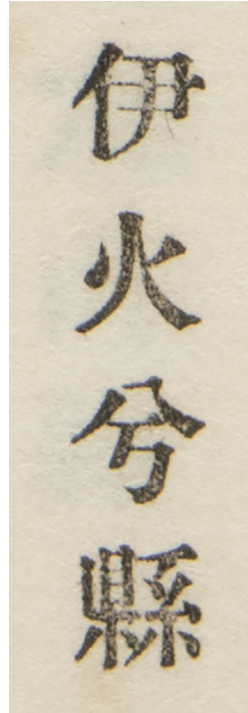
刊本①



刊本②



刊本③



曲城郡本高勾麗屈火郡景德王改名今臨河
郡領縣一緣一作梓武縣本高勾麗併火弓縣景

德王改名今安德縣

野城郡本高勾麗也尸忽郡景德王改名今盈
德郡領縣二真安縣本高勾麗助攬縣景德王
改名今甫城府積善縣本高勾麗青已縣景德
王改名今青鳧縣

有鄰郡本高勾麗于尸郡景德王改名今禮州
領縣一海阿縣本高勾麗阿弓縣景德王改名
今清河縣

曲城郡本高句麗屈火郡景德王改名今臨河

郡領縣一緣一作禪正縣本高句麗併火兮縣景德

德王改名今安德縣

野城郡本高句麗也尸忽郡景德王改名今盈

德郡領縣二真安縣本高句麗助攬縣景德王

改名今甯城府積善縣本高句麗青己縣景德

王改名今青鳧縣

有鄰郡本高句麗于尸郡景德王改名今禮州

領縣一海阿縣本高句麗阿兮縣景德王改名

神田本新刊
本仍買作仍
置今從近衛
本文獻備考
注云置一作
買
神田本近衛
本緣武作緣
武今從新刊
本及與地勝
覽
新刊本文獻
備考伊作併
與地勝覽同
本文
神田本盈字
關今從近衛
本

溟州本高句麗河西良。瑟一作何後屬新羅。賈耽古今郡國志云。今
新羅北界。溟州蓋濊之古國。前史以扶餘為濊地。蓋誤。善德王時
為小京。置仕臣。太宗王五年。唐顯慶三年。以何瑟羅地連靺鞨。罷
京為州。置軍主以鎮之。景德王十六年。改為溟州。今因之。領縣四。
旌善縣本高句麗仍買縣。景德王改名。今因之。棟一作隄縣本高
句麗束吐縣。景德王改名。今未詳。支山縣本高句麗縣。景德王因
之。今連谷縣。洞山縣本高句麗穴山縣。景德王改名。今因之。
曲城郡本高句麗屈火郡。景德王改名。今臨河郡。領縣一。緣一作
正縣本高句麗伊火兮縣。景德王改名。今安德縣。
野城郡本高句麗也尸忽郡。景德王改名。今盈德郡。領縣二。真安

刊本③卷35「緣武縣」左3行目。

三國史記卷三十七

峴縣一云伊文縣 達忽 猪達穴縣一云烏斯押 平

珍峴縣一云平珍波衣 道臨縣乙浦助 休壤郡云一

金備 習比谷一作吞 吐上縣 岐淵縣 鵠浦

縣一云古衣浦 竹峴縣一云奈生於 滿若縣一云兮

波利縣 于珍也郡 波且縣一云豐波 也尸忽

郡 助攬郡一云攬 青已縣 屈火縣 伊火

兮縣 于尸郡 阿兮縣 悉直郡一云直史 羽

谷縣

右高句麗州郡縣共一百六十四其新羅改名

及今名見新羅志

刊本①卷37「伊火兮縣」左5行目。

屈火縣

伊火兮縣

于尸郡

阿兮縣

悉直郡

史直

羽谷縣

右高句麗州郡縣共一百六十四其新羅改名
及今名見新羅志

百濟

後漢書云三韓凡七十八國百濟是其一國焉

北史云百濟東極新羅西南俱限大海北際漢

江其都曰居拔城又云固麻城其外更有五方

城通典云百濟南接新羅北距高麗西限大海

三國東夷傳
百濟傳
第三十一

金一作習比谷一作吐上縣 岐淵縣 鵠浦縣一云古竹

峴縣生於奈 滿若縣一云 波利縣 于珍也郡 波且縣一云

豐波 也尸忽郡 助攬郡一云 青已縣 屈火縣 伊火兮縣

于尸郡 阿兮縣 悉直郡一云 羽谷縣

右高句麗州郡縣共一百六十四其新羅改名及今名見新羅志

百濟

後漢書云三韓凡七十八國百濟是其一國焉北史云百濟東極新羅西南俱限大海北際漢江其都曰居拔城又云固麻城其外更有五方城通典云百濟南接新羅北距高麗西限大海舊唐書云百濟扶餘之別種東北新羅西渡海至越州南渡海至倭北高

輿地勝覽滿
若作滿卿注
一云恐滿卿
通神田本
一云今作滿兮
近衛本手攬
作才攬神田
本作木攬新
刊本闕于字

刊本③卷37「伊火兮縣」右3行目。